



～のどうせ空ませ動画研究

18歳未満の購入・閲覧を禁止します。



この同人誌は同人ゲーム「裏雀莊二咲ク花」を  
フルカラー同人誌形式に編集したものです。

2010 シャーベットソフト



(もつと強くななくちゃ……。宮永さんと全国に行くつて約束したんだからっ!)

そう決意して飛び込んだ一軒の雀荘。  
しかし、この雀荘に入った時には満ちあふれていた自信が、嘘のように溶けてしまつた。  
これで6連敗……。  
しかも私一人を狙い撃ちするような打ち方、そしてこの妙な強さは一体……?

(こんなことって……確率的にもありえません……。まさか、イカサマ?)

でも自動卓だから、積み込みはできないはず。この状況でイカサマができるとしたら。  
私は思い切つて上家の男の手首を掴んだ。ニギつていた牌がこぼれ落ちる。

「やつぱり。自分が有利になるように、牌をすり替えていたんですね」

「ちつ……」

「では、これまでの試合は無効ということになりますね」

「お嬢ちゃん、知らないのかい? この裏世界じやイカサマはやつた方よりやられる方が  
悪いんだぜ……」

「なつ! 私は認めませんよ、そんな……不正を正当化するだなんて」

「悪いね。ここにはここルールつてものがあるんだよ」

「おうおう嬢ちゃん! 負け分きつちり耳揃えて払つてもらおうじやねエか!」

突然スゴみ出す男たち。  
これほどの大金、高校生の小遣いで払えるわけがない。

「払えません! こんなめちゃくちなルール、麻雀でもなんでもありませんから!」  
「だつたら仕方ないね。フフフ……。金が払えないなら、身体で払つてもらおうか!」

——パチン!

指を鳴らすと、奥から腹の出た中年の男たちが現れ、上半身裸で私に近づいてくる。

「いや、来ないで……こっちに来ないでください……」  
「負け分はきつちり返してもらおうぜ。さあ、のどかちゃん。

「ちやんとお客様に喜んでもらうんだよ」

「お……お客様?」

「まさか麻雀雑誌にも載つてるほどの有名JKに、あんなことや、こんなこと

してもらえるなんてな」

「客つてまさか、私がこの人たちの相手を……?」

「麻雀で……のはず、ありませんね……」

「クックツク、さすがに頭がいいじやないか」

「う……うそ……無理です、絶対無理! ……どうして、どうしてこんなことに……」

「助けを呼んでも誰もこないぜ、こんな裏世界の雀荘にはな!」

すべてを悟った瞬間、絶望とともに目の前が真っ暗になつていった。





「い、いやああああああつ！」

「おほほ、見た目と同じですごい弾力だね」「やめて、そんな手で触らないでください！」

いや、離して……離し

制服の中に隠れて圧迫されていた乳房が、ぽろりと弾けて外気に触れる。

「うほつ、すげえ弾力ござ!!

「はあ、あああ……ダメ……そこは触っちゃ……あう、あつ、はあつ」

「いや、離して……あは、あああつ、おつぱいはダメです……そこは……んんんつ！」

「感じてなんか……ん……んんう……ない……」

口ではそう言いながらも、触れられてもいらない乳首が何だか切なくつて……。

「あう、あ、あああ……はう……うぐ、ううつ……

「切なそうな声出しちやつて、もしかして乳首もいじつてほしいのかな？」

ぬるつとした舌が、突起を包み咥え込んでいく。

卷之三

頭かぼりとして、何か熱いのが背筋を駆け上ってくる。それと同時にアソコの奥が痺れてきて……。

卷之三

「ひやあああつ、何かきちやうつ、おつばいで、アソコの奥うつ、  
「あああう、なんていやらしいコだ。胸だけでイツちやうのかよ。  
ん、ふううんつ！」

いいんだよ そのままイツでも 何度もイツちゃって！」

生まれて初めての感覚だつた。

一瞬、ふわつとなつたかと思つたら、続けてものすごい衝撃が迫ってきて……。

「はあ、はあ、はあ……これがイクツて、ことなんですか……  
すごい、こんなのつて……あああ……」

悔しくて、涙が溢れてくる。でも今は泣けない。  
ここで弱みを見せたら、また男たちを調子づかせてしまう。  
だがそんな決意を打ち碎くように、男が穿いていたズボンを脱ぎ捨てて言つた。



「一気にいくぞ。せーの、ぐうううううつ！」  
「はあ、ああ、ん……ん、んぐつ……んああああああああああああああつ！！」

膣内で何かが突き破られ、そのまま奥へと入つてくる。

「い、今、私つ、だめ、あはつ、ああああつ……つ、痛つ！」

「これでお前もついに大人の仲間入りだ」  
「やつぱり、私……はあ、んつ、こんなもので、う……うつ……ひつく……」

味わつたことのない衝撃に涙がこぼれ、何も考えられない。

すると1人の男が、私の腕をとつて――。

ふすつ！

「へ、な、なにつ……今なにをしたんですか！？」

「のどかちやんがあま  
打つてあげたんだよ」  
「気持ちよくなる薬つ

「気持ちよくなる薬つて……ひやあああああんつ！」

それを待つていたかのように、また男の動きが激しさを増していく。

「喜べよ、體内にぶちまけてやるからな！」

「まさかこのまま中につ……！」  
あ、ああつ、い、いやああああああああああああああつ！！！  
ダメえつ！！

奥をこつこつと突かれる度に、頭が真っ白になつて、快感にのたうちまわり、叫びだしてしまふ。

「あ、あ、あ、あ、あつ、イク、イクのつ、いやなのに、ああああつ、

「あ、あ、あ、あ、あつ、イク、イクのつ、  
イクつ、イツちゃんううううううううつ！！！」

ピユルツ！ ピユクピユクツ、ドピユツ、ピユクツ！！

「はあああああああああ～～！ 入つてきて……あは、ああつ……  
熱いのが入つてきてるうううつ……あああ……それ以上きちゃだ  
ほんとに赤ちゃんとできちゃうから……」

薬のせいなのか、脇内に出されたというのに、さらに身体が熱く火照つてくる。薬をさらに打たれて、全身に回つて頭が完全にダメになっちゃう前に、なんとかここから逃げ出さないと……。

「おつと、この程度で負け分を解消できると思ってるのか？ お嬢ちゃんにはまだまだ働いてもらわないとな」



「ひやあつ、あんつ、だめって言つたのに、またあああつ、……入つて、擦れてつ……ぴつたりしてて……さつきのと全然ちがいます！」

「目隠ししてるから感触ばつちり感じるだろ？ やつぱ本物はいいだろ？」  
「ああ、もう膣内はぐちよぐちよじやねえか！」

いやらしい水音がくちゅくちゅと鳴り響き、肉と肉とが擦れ合い、見えなくともその音を聞くだけで、私の心をだめにしてしまう。

「もうだめ、おかしくなつちやいますっ！ あん、ああつ、き、気持ちよくなり過ぎて……感覚がなくなつて、ううううううつ！」

「いいよ、もつと気持ちよくなつて。そんなのどかちゃんを俺たちはもつと見たいんだ」

——ズブリ。

「あああんつ、またあああつ……！」

トドメを刺すように、また注射を打つてくる。

「いや、こんなに打たれたらつ……本当にだめになつちやいます！ 狂つちやう、狂つちやううう！！ ——ひやつ！」

いきなり視界が明るくなつた。  
そして目の前には、手にビデオカメラを持った男が、じつとこっちを映していた。

「え、やだつ……！ それつて、撮つてるの！？」

「安心して。今までの様子はちゃんとビデオに収めておいてあげたから」

男たちはさらに興奮を高めたように、ぐりぐりと奥まで腰を打ち付けて子宮口を小突かれる。

「うぐつ……出つ……るつ……！」

「やだつ、またピクつて！ あ、あ、あ、あつ、くる、きちやいます！ 私も感じてつ、イクッ、イキます、イッちやいますうう！ 気持ちいいつ！ きもひいいいい！！！」

ドピュツ！ ドビュドピュツ！ ピュクッ、ピュル！！

「ああああああああ！ また出されてるうううつ！ ドロドロの精液がつ、んううつ」

身体は快感に酔いしれてびくびくと震えているが、心は絶望の淵に落とされている。膣内に出されたことも、そして、そのことに対する大声で気持ちいいと叫んでしまった自分自身にも……。



「ふわああああああつ、しょ、しょこはああああうう！お、おひりいい！」  
「嬉しいだろ？3本もチンポ咥えさせてやつてるんだからな」  
「あちゅ、ちゅるる、ほつきいの、んくつ、ぐ、ぐるじい、ああうう、しょこは、  
ほまんこみたいに、ひろがらないでしゅからあ！」

すでに腸内まで薬に侵されていたのか、その苦しさも次第に熱い快感へと変わっていく。

「おかしくなつちやう、あむう、あ、あむむつ、じゅく、んぬうつ！」  
「わたし、もう……このままじゃ、おひんひんの虜に、はぐつ、あうううつ！」  
「でも幸せなんでしょ？」  
「はひ、幸せですう……だから最後は、ここに、するつ、じゅるるるるくく！」  
「ここにいっぱい、はむう、あう、ふうううんつ……お口にも、苦いの、ください！」  
「精液出して欲しいんだ？オチンチンから出てくるあの汚い精液を」  
「汚いだなんて、はむ、じゅるる、ぢゅるるつ、んつ……んく、ちゅつ、  
ちゅばばつ、熱いの、欲しいです……、んんつ」

つい数分前の自分には、信じられないような台詞だつた。  
でもこれが、嘘偽りない本当の気持ち。  
あのドロリとした粘液が、今は欲しくて欲しくて堪らなかつた。

「うぐ……またきつくなつて……つ！」  
「んじゅるるつ、んつ、ふふうううーーつ！きてください、あ、はあつ、  
遠慮なんてしなくていいですから、ここに吐き出してつ、んんーーーつ！」  
「誰が遠慮なんてするかよ！お望みどおり出してやるぜ！」  
「ふわあああ、うれしいですつ……んぐつ、するるるつ！」  
早くここにつ、はふつ、んつ、じやないと、先に私が、はあ、ああああつ！  
いっぱいオチンチン突かれて、んぶううつ！んぐううううーーつ！！！」

ドピュツドピュ！ ピュグッ！ ピュルツ！ ドピュツ！

「はむむむつ、んぐ、んつ……んぐ……んぶぶぶつ……ん、ぐちゅ……」  
「ちゃんと全部飲み干せよ。お前がおねだりしたんだからな」  
「はい、もちろんです……ん……ごく……んぶ。はあ……お口もアソコも……んんつ、  
……お尻にもいっぱい……火傷しちゃいそうなぐらい、熱いです……」

子宮と直腸へ精液が注がれるたびに、胸の奥が熱く満たされていく。  
だがそれだけでは欲求は満たされることはなく、更なる獲物を探し求めていく。

「あぶ、んじゅ……まだこれ、おつき今までですね。だつたらもう1回、いいですよね」  
「ごめんなさいね、宮永さん。あなたとの約束は果たせそうにないみたいです……」



「はあ、はあ、だめです……こんなところで、はあああ～！」  
「おつと、人がこんなにいるつていうのに、そんな声出しちゃつていいのかな？」  
「だつて、それはあなたたちが、あん、あああつ、だめです、勝手に声つ、うううつ！」  
「俺たちはただきつかけを与えてやつたに過ぎない。今こうやつてバイブで感じてる  
この姿こそが、本当の原村和なんだよ」  
「はあ、ああ、これが本当の、あああつ、私なんですね……」  
「確かめてみるか？ このまま止めちゃつたら、お前はどうなつちやうだろうな」  
「それだけは……認めますから……こんな身体になつちやつたのは、  
全部私がエッチだからで……。だから抜かないでください、いっぱいご褒美ください」

学校からの帰りの電車の中で原村さんを見つけた。  
最近ずっと休んでいたけど、体調でも崩していたのかな？ 颜色も悪くて苦しそうだし。  
なんとか人ごみをかきわけ、近づこうとするも、そんなところばかり、  
通勤ラッシュの車内はぎゅうぎゅう詰めで、その場から一歩も動くことができなかつた。

「いちばん感じちやうところ……ん……んん……そこつ……そんなところばかり、  
ブルブルしたら……みんなの前で……あう、んんつ……」  
「いいぞ、好きなだけイツて。それがお前の望みなんだろ？」  
「そうですが、ああ、こんな場所で……公衆の面前で、やつぱり恥ずかしいです」

何かを必死に耐えているみたいだつた。  
彼女の背後にぴつたりと張り付くように、男が立つていて、  
その手は原村さんのスカートの中に入つていて……。

(間違いないよ。原村さん、痴漢に遭つてるんだ！)

ここからでも微かに聞こえてくる、原村さんの吐息……。

「あう、ああ、あつ、ああつ、いい、いいよお……だめなのに、感じちやう……。  
またすごいのきちやいます」  
「でも本物のチンポの方が好きなんだろ？」  
「あ、当たり前じゃないですか。あの日から全然、ここに挿れてくれないんですもの。  
……焦らしてるとんですか？ もう私、欲しくて欲しくて……」  
「ククク……おねだりか。さすがにもう我慢できなくなつてるようだな。  
いいだろ、次の駅で雀荘でしたとき以上のものをお見舞いしてやる」

男の口が確かにそう動いたのを、私は見逃さなかつた。

(……え？ 雀荘？ この辺りにある雀荘といつたら、たしか……。)

などと考えていたら、ドアが開き、原村さんと男が一緒になつて降りていつてしまつた。  
急いであとを追おうとするも、人混みに邪魔されて、結局は見失つてしまつた。

「はあ、あああ、本物のオチンチンです……やつと……んちゅ、ちゅる……  
こんなにいっぱい、うれしいです……」

「ただ数日お預けしてただけでこの様かよ。つたく、とんだ淫乱女だな」「  
「しようがないじゃないですか、薬だけ注射してくれても、はあ、あう、んつ、  
私はこれでいっぱい可愛がつてもらわなくちゃ、れる、ちゅるつ、だめなんです」

何度も自分の指で慰めてはみたけど、あの時のような満足感はまつたく得られなかつた。  
最初が最初だつただけに、普通のオナニー やセックスなんかじや物足りなくなつていた。

「もつと子宮の奥まで、突いて、あ、あつ、そこ、そこがいちばん感じちゃうんですつ！  
久しぶりだから、その分もいっぱい可愛がつて、ひやああああつ！」

「言われなくとも可愛がつてやるよ。こつちだつて久しぶりなんだからな  
「あ、そうでしたね、あん、じゅく、じゅるるつ、だつたら今までの分も、  
ここで発散しちゃつてくださいねつ！」

自ら腰を振り乱し、前後の穴に入つてくる肉棒に秘肉を擦り合わせていく。

「ふああ、あつ、だひてくだしやい、はあつ、ひつぱい、ひつぱい、んんんつ、  
ごほうびくだしやいつ！ ほほに、いっぱい、あぶつ、じゅるるつ、ちゅるるる！  
「いいんだな、出して。本当にいいんだな！ ならこの場所に相応しく、  
お前には肉便器になつてもらおうか！」

「はひつ、だして、じやないと、ふあたしは、んんぐううつ、まんじょくなんて、  
でひないんではう、んんつ、くだしやい、ちゅば、あ、ふううつ」

ドピュッ！ ドピュッ！ ピュルッ、ピュルルルッ！

「ひやああああつ、あう、ああ、はあああくく！ お、奥に当たつてりゅうくく！  
おなか焼けちゃう！ おひりのほうにも、うれしい……！ ひあわせすうくく！」

欲望の塊である白いものが、私めがけて放出され、目の前に飛び散つていく。

「はふ、んつ、熱いのが、んんうつ……もつともつと出してください、  
私は肉便器ですから、ここに……汚いのいっぱい出して、汚れを落としてください！  
「フフッ、こうして精液ひつかけられてるのを見ると、本当に肉便器だな」

「はい、私は皆さんの精液おトイレですか……だからいっぱいかけてください……。  
あう、ちゅる……」

この瞬間が私にとつては最良の時……。  
麻雀で和了ると同じくらい、最高の瞬間だつた。

「こくん……。うふふ、おいひい……」





「は、原村さん……おかしいよ。もうこんなのもう見てられないよ……。今すぐ原村さんを返してください!」

「ああ、返してあげるよ。ただし、この対局にお嬢ちゃんが勝つたらね。  
でも君が負けを場合は……フフフ、樂／みどりえ

原村さんを捜し回つて入つた一軒の雀荘。ようやく見つけたと思つたら、そこには信じられない光景が広がつていた。

「宮永さんつ、あはつ、あああつ！

「うつ、ううつ……ダメっ！ 力が入らない……  
はあ、あああつ、この感じは、またああつ！」

「ようやく今朝打つた薬が効いてきたようだな」「はあ、あああつ、それつて、また私が……！」

「友達の前でイツちまえ。それが最高の媚薬となつてまたお前を成長させていくからよ」「いやですっ！」宮永さんの前で、あんなつ……あはつ、あああつ、んあああつ！」

負けるつさこはいかよい。勝つて原村をひき助けよいか

卷之三

「そ、そんな……」

点棒があつて、どう間に尽きてしまつた。それはこの対局での敗北を意味していた。

「あ、あつ、宮永さんつ……あん、んぐつ……

私も、もう……あ、んああ……」

脇全体が痺れてきて、もう抵抗する力もなくなっていた。

やだ、なんですか、この感じは……今までとちがいます。

ああ、は、ヒリヒリでてきて、なにが出てきそ？！

ドピュ、ドピュツ、ビュル！！ ドクドクツ、ドプツ！

「宮永さん……あああ……ごめんなさい……私のせいで、ごめんなさい……」



「い、痛いよつ、あああ……痛いよ原村さんつ！いや、いやああああつ！」  
「ごめんなさい宮永さん、私のせいで、ごめんなさい……」

あの時の痛さは身をもつて体験している。  
だから宮永さんの気持ちは文字通り、痛いほど伝わってくる。

「らめつ……まだアソコのなか、ヒリヒリして……だめつ、もつと優しく……。  
やつ、いやつ……強くしないで、あうつ、あ、ああつ、んあああああつ！」

「だつたら痛いのが消えちやう薬があるんだけど、試してみるかい？」

「だめよ！そんなことしたら宮永さんもつ……！」

「でもいいのか？大事なお友達がこのまま痛い思いをしてても」

「だつたら私が気持ちよくさせてあげます……それがせめてもの償いだから……」

「あうつ、やだつ……そんなとこ舐めちゃだめだよ……そこは汚いから……」

「ちゅる、んちゅ……でもここ、気持ちいいでしょ？」

「はあ、ああ、よくわからないけど、すごい……んんつ！」

「もつといっぱい舐めてあげますね……その痛みが快感に変わるようにな……」

「ああつ、ピリつてきちゃうよ……原村さんどうしよう……」

「私、どうしちゃつたの……、はあ、ああ、何だか熱くなつて……ん……んんつ」

赤い血に混じつて、徐々に愛液も漏れ出してきていた。

「あんつ、ふうううつ……やつ……痛いのに、気持ちいいよ……なんなのこれ……、  
あ、んつ、さつきから、ジンジンしてきてつ……！」

「それがイクつてことだよ、覚えておけ。これからは毎日味わうことになるんだからな」

「イクつて、何ですか……ふわあつ、ああつ、怖いよ、何か来る……」

「原村さんつ、助けて、また奥からきちゃつてるよ！」

「大丈夫です、それはすごく気持ちいいものだから……怖くなんてありませんから」

「本当にっ？ イクよ、イッちやうよつ！ アソコがもう、いうこときいてくれなくて！

「あ、あつ、んああつ、ふわああああああああああああつ！」

ドピュツ！ ドピュツ！ ビュルツ！

「あああつ、んぐつ……んつ、んああ……あ、うああああつ……。  
さつきからこれ……私の膣内に入つてきてる熱いのつて、これつてえ……！」

「なんだ、本物の精液は見たことないのか？ 危険日じやないことを祈るばかりだな」

「う、うそ……うそだ……うそだよ……う、うう……ふえええええ……」

「おつと、泣いてる暇なんてないんだぞ。まだまだお楽しみはこれからなんだからな」

——チクツ！

「……つ！ 痛つ！」

「……そんな……宮永さんまで」

とうとう注射を打たれてしまつた。  
これで宮永さんも、元の世界には戻れなくなつてしまふ。



「あむ、ちゅば……原村さん、これでいいのかな……？ ん、ふむ、ちゅるる……」「嫌なら無理しなくてもいいですかからね。宮永さんの分も、私が頑張つて舐めますから」「ダメだよ、そんなの。原村さんにだけ押し付けちゃうなんて……。」

大丈夫 私も一緒に頑張るから

「たぬだよ  
そんなの 原木さんにだけ押し付けせやうなんて……」

「宮永さん……」

「こうすればいんだよね。ああ、ちゅつ……あううう、でも変な味がするよお……。  
嫌なのにでも……ちゅぶぶつ、ちよつとだけ、いいかもつて思つてきちゃう……」

さつき打つたれた薬のせいで正常な思考が麻痺してしまつてゐる。このままじや二人とも、いすれはこのオチンチンの虜になつちやう……

「だめ、なんですから……また、宮永さんの前で、あんなはしたない姿……

あ、ちゅ、ちゅばつ……あ、ふうつ……」  
「うつあ、さすが原村さん、お……おつぱい二者こそんな器用こ紙りうやうなして。

私もちよつと舐めちゃおうかな。ふむ……ちゅる、ちゅぱ……あむ……ううう……」

亀頭を舐めまわす宮永さんの唾液が竿を伝い、たまたまさんを咥えてる私の口にもその滴が入つてくる。

(——やだ、もしかしてこれつて間接キスじゃないの? )

心臓が飛ぶ出でさせたうな、バキバキの音が

宮永さんはペニスにキスした状態から、上目遣いでじつとこつちを見つめてくる。

「だめ、そんな目で私を見ないで……あう、んんつ……ふうつ……んぐ……ふうう！」

「くつ、急に激しくつ……！」このまま……つ！喉奥にぶちまけてやるぜ

もう戻れなくなつちやいまふううつ……」

「いいよ、原木さん。私も一緒に歩いていくから、だからね？」

「うん、全國じゃないけど、原村さんとならいつちゃつてもいいよ」

ギリギリのところで思い止まつていたものが、宮永さんの一言で崩れ去つていく。

「くだしやい……私のここに、あなたの精液らひてくだしやいいつ！」  
「わ、私も……さつきはオマンコだつたから、今度はこつちのお口にもください！」  
「生憎と俺のこいつはひとつしかないのでね。欲しいなら、その顔にぶつかけてやるよ」

ピュルルルルルルーツ!!

二人の顔に白濁液が勢いよく飛散して……  
うつとりしながら、額から垂れてくる精液を舌で汲み取った。



「ふああつ、はああつ、さつきと全然ちがうよおつ！  
膣内で擦れて、はああつ、本当にさつきと同じオチンチンなお！？」

「うああつ、ああつ、原村さんつ、んあああつ、すごいよお、これえ……」「宮永さん、やつ、そんなに動いたら、乳首が当たつて、私もきちゃいますからつ！」「なんだか原村さんともエツチしてゐみたいで、すごく興奮してきちゃう」「ああ、宮永さんもなんだ……じつは私もなんです。」

「なんだか原村さんともエッチしてゐみたいで、すごく興奮してきちゃう」「ああ、宮永さんもなんだ……じつは私もなんです。こうしてると宮永さんと、いけないことしてゐみたいで……あああんっ！」「うううつ、オマンコの音、聞かれちゃつてるよ……恥ずかしい音、あん、はあつ、

「うううつ、オマンコの音、聞かれちゃつてるよ……恥ずかしい音、あん、はあつ、でも止まらないの、お汁でいっぱいだから、ひやあつ、はああつ！」

「お前、本当にさつきまで処女だつたのか？ 吸いついて離れないじやないか」「どうしよう、原村さんつ！ おかしくなつちやう、もう私じや止められないよ！」  
「大丈夫です、そのまま身を任せて。そしたら最後にはきつと……」「きつとなに？ なんなの？ なにがどうなつちやうの！？」

「大丈夫です。そのまま身を任せても、そしたら最後にはきっと……」「きつとなく？　なんなの？　なにがどうなつちやうの！？」  
「そんなの決まつてるだろ。遠慮しないで全部膣内で受け止めろよ！」  
「あ、ああ、ふああああつ……やつぱりそうなんだ、くるよ、きちやうよ！」

そうは言われても、私もそれどころではなかつた。

宮永さんと抱き合ってゐたけでもどうにかなりそうなのにな……  
こんな近くで、そんなあられもない姿を見せられたら……。

「ダメっ、私もきちやいそうです、おっぱいだけでイッちゃいそうですっ！」

「はい、私のおっぱい敏感だから、オチンチンじゃなくてもすぐにあ、はあ、くるつ、私もイッちやいますつ！」

「宮永さん、イク、イツちやいます！ おっぱいでオマンコ、イクうううううううつ！」

ドピュツ！ ドピュツ！ ドピュツ！ ドブ、ドブツ！！

「はあああああああつ、あんつ、ああああああああああああ～～～！」  
腔内にドピュドピュ出されてるよおおくつ！」

抱き合つたまま、2人してイッてしまつた。  
たぶん、こういうことが幸せつてことなんだと思う。  
大好きな人と、大好きなオチンチンに囲まれて……奴隸でもなんでもいい。  
こんな毎日が続いてくれれば、他にはもう何もいらない。



あれから何ヶ月が経つんだろうか……。  
宮永さんが来てから、二人一緒に薬を打たれては、毎日のように犯されていた。  
そのおかげで、嬉しいことがひとつあった。

「あん、ああつ、激しいのつ！　いいです！　ですからもつと、はああああつ！」  
「いいのか、妊婦がそんなに激しく動いて？　お腹の子に影響が出るんじやないか？」  
「この子のことは、心配しないでください。  
きつとお腹の中で悦んでいますから……パパに愛されてるつてつ！」

そう。このお腹には、大好きなご主人様たちとの間に宿つた赤ちゃんがいる。そして宮永さんのお腹の中にも……。新たな命が生まれたのだ。

「私も愛して欲しいよ。この子もパパのこと、いっぱい感じたいってそう言つてるもん」「わかつたわかつた。でも今はのどかママの番なんだ。俺の身体は一つしかないからな」「そうですよ。私がイクまでだめなんですから……。」  
今はご主人様のオチンチン、私だけのものなんですよ

そう言つてパンパンに張つた私の胸を強く揉みしだく。

「いやつ！ あうつ、ふわああつ、そんなに揉んじゃつ！ んんつ、んぐううつ！  
「知つてるよ。こうしたら私のおしつこみみたいにすぐお漏らししちゃうんだよね」  
「ええ！？ どうして知つてるんですか！ あああつ、やだ、ミルク出ちゃいます！  
精液みたいに白いの、乳首から出ちやいます！」

ご主人様の激しい腰つきと宮永さんの容赦ない愛撫に、快感がどんどん高まっていく。

「どうやらそろそろみたいだな……」「はいっ、イクツ、イツちゃいます！ 私もご主人様みたいに、おっぱいからつ！」「いいよ、イツちゃつても。ほら、ここからいつぱいミルク出してつ！」  
「私だけじやいやす！ ご主人様のオチンポミルク出してください！」「私にも、この子にもつ、いつぱい飲ませてくださいつ！」  
「いいぜ、2人一緒に飲ませてやるよ」

「ひやあつ、あつ、あ、あああああああああああああああああつ！！」

ピュルツ！ ピュルツ！ ピュルルルルツ！！ ドピュツ、ドピュツ、ピュプツ！  
子種が入つてくると同時に、乳首からミルクが飛び出す。

「ふわあああああつ！ 出ちゃつてますつ！ 気持ちいいと出てきちゃうの！  
おっぱいからミルク、どびゅどびゅつてえ！」

「これでこの子もわかつてくれただろう。この俺がパパだということが」「はい、この子も悦んでくれてます。さつきから嬉しそうにお腹を叩いて、ああつ！ やだ、この子もパパの精液で感じちゃてるのかも」



W  
ツ

ちゅ

ちゅ

「赤ちゃんにまで届いてきちゃう、パパの精子が。びっくりして、起きちゃうかも」「いいじゃないか。パパとママが愛し合つてのところを見てもらえばさ」「わ、私もご主人様の家族なんだからっ！ 原村さんだけなんてズルイですよ！」  
「ああ、わかつてるよ。咲も大事な家族の一員だ」「だつてさ。原村さん、聞いた？」  
「もちろんですよ、宮永さんは私にとつても、ご主人様と同じぐらい大好きだから」「うれしい……幸せだよお！」  
「宮永さん……ん……ちゅつ♪」  
「あんつ♪」

気がついたら唇を押しつけていた。  
宮永さんと家族になれたのがうれしくて、こうすることできしか  
その気持ちを表現することができなかつたから。

「好きよ、宮永さん……あう……ちゅる……」

思えばこれが、私にとつて初めてのキスだつた。  
つまりはファーストキスで、まさかこんな形で奪われちゃうなんて思いもしなかつた。

（でも嬉しい。初めてのキスが大好きな人とだなんて……）

快感とはまた別の興奮が押し寄せてくる。  
胸の奥につかえていたものが一気に開放され、代わりにポカポカとした温かい感情が  
その隙間に入り込んでくる。  
一緒に麻雀で全国に行こうつて、その約束は果たせなかつたけど……。  
こうしていつまでも一緒に居られるなら、それだけでもう十分だ。

（宮永さんとならどこまでも……）

「ああつ……愛されてるの、伝わつてくる……心も身体も、みんな繋がつてるつて……。

家族なんだつて……あ、ああつ、こんな気持ち久しぶりだよ」

そう言つて笑う宮永さんの目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「お母さんとお姉ちゃんがいた、あの時と同じつ、これからは家族みんなで……、  
仲良く暮らしていこうね……」  
「はい……もちろんです……」

生まれてくるこの子たちと、いつまでも一緒に……。



復讐のピカレスク美少女ADV  
5月リリース予定

リザイ  
RE SIGN



↑『リザイン』よろしくです!  
そろそろ最後の仕上げ中! (ここが大事)

裏雀莊二咲ケ花  
のどっち孕ませ動画研究  
同人誌版

## あとがき

のどっち可愛いですよね～。咲もカワユス、二人がめちゃくちゃにされたらさぞエロ可愛かろう、と思っていてもたってもいられず企画した作品の同人誌版です。

駅のトイレで輪姦、とかバニー服で調教、とか、やりたいシチュを堪能しましたですよ。あと和の魅力は敬語っぽい口調にもありますよね！ ね！

シャーベットソフト / 代表 雪白イマ  
URL - <http://www.sherbetsoft.com/>

印刷・コーシン出版

SBT-105

禁無断転載・複製・複写  
2010/4/29 発行